



アイヌ語で「広場」の意味
文 北原 モコットウナン 絵 小笠原 小夜

テタロクヤンの

「こちらにどうぞ、おかけください」の意味

もんべつあつし 門別徳司さん(37)=ハンター

—イランカラブテ（こんにちには）。白高町庫富ご出身です。実は、小学生の門別さんがクリムセ（弓のおどり）をおどっているのを見たことがあるんです。

おどりの保存会があって、時々お祭りに出ていました。クリムセは地元のおじさんから教わったんです。ほかの地域とも交流があって、エムシムセ（つるぎのおどり）は白簾の方から教わりました。

—お仕事を教えてください。

鉄砲でシカをうつハンターをしています。伝統的な家を復元する手伝いなどもします。もともとは会社員として働きながら、狩猟免許を取って30歳でハンターになりました。すでに結婚していたので、思い切りがいました。シカはどういうふう料理してもおいしいですよ。シカじるや焼き肉とか。シカの角やクマのつめでアクセサリを作って販売もしています。

—売り物ではないようですが、シカのすじ（けん）を使

って弓のげん（しきく）もされてますね。

先祖のやったことを自分がどれだけできるのか、挑戦してみたいんです。今は法律で禁止されていますが、いつか弓矢でもシカをとってみたいと思っています。

山に入る前とシカをとった後には必ずおいのりをします。おいのりの言葉は、鍋沢保さんという、地元の年配の方に教えていただいたんです。自分が教わったこと、体験して知ったことを他の人にも伝えたいと思って、マタギキャンプというイベントを開いています。参加者といっしょに山を歩いて、わなを仕掛けるところやシカの解体を見てもらったりとか、ヨブスマソウでつるぎおを作ったり。昔から続いてきた文化には貴重な知恵がふくまれています。みなさんも、ふれる機会があったら積極的に体験してほしいですね。

このコーナーでは、さまざまなお仕事をアイヌの人にインタビューします。

木をくりぬいて作った丸木舟のこと。サケ漁や荷物の運搬など川や湖で使われ、生活に欠かせない道具です。イタオマチフはそのチフに板を取り付け、舟を強く大きくしたものです。海や大きな川でも使いました。

木をくりぬいて作ったロープや、桜の木の皮が使われ、すきまから水が入ってこないようにコゲをつめました。ロープなどで板をつなぐのは、波の強い力を受けてもこわれないための工夫です。船のへりには車権という権が取り付けられ、これを両手にもって交互に回すようにこぎます。かなりスピードが出て、漁や交易を行うときに大活躍です。車権の技術は、東北地方の和人の船にも取り入れられたとい

ます。（泉洋輔・札幌大学ウレシバクラブ3年生）

昔から続く文化体験して

チフ

タンベキヒナムマン

「きみ、これ知ってる?」の意味

村人たちは見知らぬ土地へ交易に行く。自分も行きたい気持ちをおさえられなくなった



「おまえに何かしようというのではない。私の苦しい心をだれかに聞いてもらいたかったが、父母のそばでは言えなかった。まだ幼いころ、私はアイヌの村から父母と弟とこへ来たのだ。ところが父母は交易が終わっても帰らず、泣いてばかりいた。ある朝起きると、私を残して家族はいなくなっていた。それから和人の父母が私を育てたが、家族がこいしくて泣いてばかりいた。和人の習慣を教えられ、できないと言われるのはいやだからだれよりも必死に覚えたが、むなしばかりで山にいるようになった。育った家を出て建て、父の歌を思い出して歌っては泣いていたのだ。おまえが私の弟

全てを知って交易からもどった。生き別れの兄を思うといたまれない



なら、一緒に死のうと思ったが、おまえと私の村はちがうのだな。すべて話して少しは気も晴れた。もう今の父母を困らせるのはやめにする」と泣きながら話しました。私も聞きながらなみだが止まりませんでした。家に帰ると、主人たちは息子の様子が変わったのを見て泣いて喜びました。そして私は村へ帰り、父を問いただすと、兄を養子にしたいと強引にたのまれ、断れずにおいてきたと言いました。腹が立ちましたが、両親のつらい気持ちもわかります。それから交易には二度と行かず、和人になった兄が泣きながら語ったことを子孫に伝えました。

交易で別の民族の養子に

この話では、日本との交易の中で、アイヌの男の子が和人の養子になり、その家と取りとして育てられます。男の子は置いて行かれたことを悲しむあまり、まわりをうらんでしまします。しかし、（生き別れの弟とは知らずに）久しぶりに会った仲間と全てを打ち明け、それ以上人をうらむことをやめたのでした。自分で相手を選んで交易をすることができたのは、一般には松前藩ができる以前のこと（400年も昔!）と言われている。今では民族をえた結婚はめずらしくありません。別の民族から養子ももらうこともしばしばありますが、かつてもそういうことがあったのかもしれないですね。

和人になった兄

一日 高管内平取町ペナコリの話

（アイヌ民族博物館「アイヌ語アーカイブス」より）

私は父と母と、3人で暮らしていました。一人っ子でかわいがられ、何事もなく育ちましたが、きょうだいがいれば楽しいのと思っていました。両親はたまに小声で何かを話して、そんなとき母はなみだ声になります。少し大きくなると父について山へ行き、父の背を向けてなみだをぬぐっていることがありました。村の人たちは交易に行くと、めずらしい食べ物などを持ち帰ってきますが、父にそのことを言っても「必要ない」というだけです。しかし私はあきらめがつきません。このころは父も山に行かず、家のそばで毛皮や肉を干しているので、山でこっそり船を造ることにしました。明日は村の人々が交易に行くというので、連れて行ってほしいとたのみこみました。父たちも「おまえが交易の支度をしているのだらう。もう止めないが、行った先で自分の村の名前を言わないように気をつけなさい」と言って安全をいのつてくれました。夕ぐれが近いころ、和人の町に着きました。村の人は「取引の相手はよく選ばないと損をする、荷物にすぎるとの相手が良いぞ」と言いつつ自分の取引先へ行きました。私も「せつかく来たのだから頑張ろう」と毛皮を背負って歩きました。

するとひととき大きな家の者が、何度も声をかけ「アツカ主人のところへ」と荷物にすぎりますが、屋敷へ行くくと、主人はとても喜びましたが、やがてこう言いました。「日が暮れたので息子が帰ってきます。大切な息子ですが、このころは気性があらくなり、毎日山にかりに行つて夜まで帰ってきません。交易をしたかったのでも来てくれて幸いですが、どうぞ息子にはお気を付けてください。帰ってきた息子は、聞いていた通り顔に火が走るかのようなおそろしい形相をしています。私を自分の部屋に呼び、どんとお酒をすすめながらアツカから来た」と聞きます。私は酒は飲まず、父の言葉を思い出して「シムカツ村です」とうそをつきました。息子は私を疑って何度も聞き直しましたが、最後まで本当のことは言わずにおきました。次の日の朝、息子はまたかきの支度をし、私には弁当を持って追ってくるようにと言いつつ行ってしまいました。途中で水の神にいのりながら、言われた通りの道を行くと、山の中にアイヌの家が1けん見えます。近くまで行くと、中からとても上手なアイヌの歌が聞こえてきます。それはあの息子の声でした。おそろおそろ中へ入り、持つて行った食べものを出すと、息子が話し始めました。



初めての和人の村。招かれた家にはおそろしい息子がいた